美紗の会 たより

モヒートの夜・そして夢のあとさき

西松 布咏

私は時代遅れな人間である。いまだに三味線で江戸と現代を行き来している。だが時代には逆らえず、いつしかパソコンを導入し生活の一部となった八年目のある日突然、起動出来なくなってしまった。膨大なデータも取り出せず、風呂敷きをかぶせ部屋の隅に捨て置かれたウインドウズに代わり、古い座り机にマックが鎮座することになった。夜になると淡い行灯のあかりが江戸へと誘ってくれる部屋に冷たく研ぎすまされた鏡台の存在は目障りだったが、これも身の因果とあきらめ二ヶ月が過ぎた。ようやく新入のマックにも慣れてきた深夜のある日友人からメールが届く。

「いつものジタンをやめ気分転換にモヒートを吸っていたらあの夜をふとなつかしく思い出しました」…あの夜？いつだったかしら…しばし記憶の糸をたぐってゆくと昨年六月の「月虹楽衣舞」公演の打ち上げ会にたどり着いた。鴎外の「雁」をモチーフにした「忍ばずの女」を舞踏・日本舞踊・三味線・ピアノ・映像のコラボレーションを苦労の末、盛況のうちに終えた忘れられない夜。その流れのカフェバーで私は細かな氷に沈んだミントのモヒートに心地よく酔ったのだ。「そのうちにお会いしましょ！」と返事を送った後…突然又マックも起動しなくなった。あまりに理不尽な現象に暗澹とし翌日サポートセンタや友人達に尽力してもらったが原因が分からずアップル社に電話する。「残念ながら修理するとデータは消えてしまいますのでご了承ください」との事務的な声。私の頭脳は記憶が蘇えったのに又パソコンの電脳はいとも簡単に消されてしまう…とそのときデジタルが人間を支配出来る怖さを知った。

しばらく暗澹たる日々を送るなかで消すことのできない思い出が走馬灯のように蘇ってくる。モヒートの夜のあの公演の打ち上げ会が最後のお別れになってしまったあの日。お酒が飲めるのにいつも車で公演に来て下さり、周囲に気配りの笑顔を絶やさず会が終わるまで残ってアッシー君を務めて下さるような優しいお人柄だった相谷昌宏さんとの。一回目のニュアンスの会からファンになって下さりもう十六年のお付き合いになる。地方公演や美味しいお食事会、華道展や美術展と、さまざまな催しにもご一緒させていただき楽しい思い出が沢山あるのに、ご自身の話は敢えてなさらなかったので年齢も職業も私生活もほとんど知らなかった。余計なことはお互いに交わさなくても公演の前夜遅くに、決まって明るい声で「相谷でーーーすっ！受付にチケットお願いしまーーす」が縁の糸だった。今でもその明るい声は鮮やかに蘇り、私が生きている限り消えることはないと思う。

相谷さんの逝去は，髭をたくわえ長身でがっしりした彼の陰でいつも静かに微笑んでいる私の大好きな大八木めいこさんからの携帯メールで知った。くしくも岐阜の粋艶会の弾き初めが始まる直前だった。六年前から私が岐阜の出稽古に通うようになったのは相谷さんの「縁の糸」のお蔭である。昨年六月の打ち上げ会でその背中を見送った後、しばらく声が聞けない寂しさをめいこさんにぶつけると「もうしばらくの休養が必要なようです」との数回のメールのやりとりを残し六十歳の若さで颯爽と風のように去ってしまった。

十八年前「岐阜オリベスク」シンポジュウムの発会式に松岡正剛氏の作詞「織部好み」に私が曲付けし舞台演奏したことがあった。相谷さんはそれで終わらせるのはもったいないとご自分の縁をたぐり寄せて下さり、十一年後の四月二十一日に友人の店「たか田八祥」で［春を味わふ］演奏会が実現した。その時の芸風に惚れて下さった粋艶会の方々が小唄の師匠に是非とのことで隔月の出稽古が始まったのである。そして縁の糸は陶芸の里・多治見へと伸び、その夜には古民家を移築した安藤夫妻の「百草ギャラリー」で［江戸の唄そして未来へ］コンサートへと繋がっていった。その翌日は相谷さんが父親のように慕う暁山窯の安藤實先生の庵にお連れ下さり膨

大な古美術のコレクションの話や陶芸作品や赴きのある書を拝見するうちにすっかりお人柄に惹かれ爾来親交させていただいている。

この四月の出稽古の帰りにどうしても安藤先生と相谷さんを偲びたいと多治見に立ちよった。以前松岡正剛氏の［面影の国講座］でご一緒した「千古の岩酒造」の中島和子さんが車で迎えにきて下さり十年ぶりの旧交を暖め合った。車窓から遠大に広がって行く雨に濡れた青葉があまりにまぶしく，「相谷さんと一緒に見たかったです」と思わずつぶやく。「何でこんなに早く逝ってしまったかなぁー」とぽつんと安藤先生の短い言葉。哀しみが狭い車にひたひたと広がっていったが、相谷さんがそばで微笑んでいるようにも思え共に静かに語りあえたひとときだった。

多治見でのことや今までの四方山話をめいこさんとしみじみ語り合いたいと、ある夜　拙い手料理と岐阜の酒を用意し行灯の灯りが揺れる我が家にお招きした。相谷さんの生き方は私の想像を遥かに超え山よりも高く海よりも深く，絶えず優しい思いやりに満ち溢れており「布咏さんは唄は上手だけど売り込みは下手だからなぁ…」と、いつも心配してましたよ。とのめいこさんの言葉に、私にまでその愛を下さっていたのだと胸が熱くなった。そして素敵に静かに育まれたお二人の愛に感動し忘れられない夜となった。

相谷さんから始まった岐阜での縁の糸は様々に繋がってゆき、この秋には美紗の会の磯部英子さんが高山のギャラリーで古代文字の個展を予定している。会期中の十月二十六日に『夢のあとさき』と題し、書・三味線・ピアノによるコラボコンサートをどのように展開しようかと目下模索している。

度重なるパソコンによる障害は時代遅れな私を多いに苦しめたが、人間の想いの糸は果てしなく続いてゆく。モヒートの夜からさまざまな「夢のあとさき」へと…そしてマックとのこれからの縁も消えることなく続いてほしいと…切に思う。

お三味線との関わり そして お師匠様との出会い

綿引 満代

私は父の生まれ故郷である茨城県勝田という所で幼稚園まで育ちました。とても小さな頃の記憶ですが曽祖父母の家が大洗という所に在り、海の傍の平屋で門や戸を開け放って一番奥の座敷の向こうに庭が有り、窓も開けると海風が玄関から真っ直ぐに庭まで通り抜けていました。その風通しの良い座敷で曾祖母が三味線を弾いていたのを覚えています。

父が言うにはその時弾き唄いしていたのが端唄だったそうです。曽祖父は材木屋の一人娘に婿に来て商売より政治に夢中になり芸者さんをごく近所に囲い家出を十五回もした放蕩でそれが悔しかったのか曾祖母は三味線をお稽古して芸者より上手いと言われていたようです。

昔から父に時代劇を観せられていた影響なのか、自分でも市川雷蔵の映画を観ているうち何となく三味線を弾いてみたいと思うようになりました。しかし二十代から家業の木材輸出入業の為、父の秘書としてマレーシア、香港、シンガポール等に滞在しておりすっかり忘れておりました。その後母の病で帰国することになり思い出したかのように恵比寿の文化センターで長唄・三味線を始めてみたのです。二、三年は夢中でお稽古しておりましたが、仕事を始めた都合で辞めてしまいました。

二〇一一年に最愛の母が亡くなりとても落ち込み、さあ何かやらなければと思った時、長唄をやっていた頃に母がくれた誕生日カードに『継続は力なり』という言葉を見つけました。母の遺言のように思い、精神的に弱っている時こそ芸が救ってくれるのではと思ったのです。

そして去年末にYouTubeでお師匠様の唄を発見し、他の方と全く違い研ぎ澄まされた凛として深みのあるお声にこの方しかいない！と早速メールをお送りして見学に行きその場で入門させて頂くことに致しました。

それからは毎回、直にお師匠様のお三味線と唄が聴ける幸せにうっとりしていましたが、自分で弾いてみますと、長唄と全く違う間や短い中に感情を込める難しさなどとてもとても大変な世界だと解りお師匠様のご指導にあたふたと付いていくのがやっとでございます。

昨日神楽坂の「おおさこの夕べ」に参加させて頂いたのですが、私にとって初めてのまとまったお師匠様のライブでした。空間、ファッション、選曲、曲順、曲それぞれに歴史等の教養と知性溢れる御講義、無駄なく的確で優雅な品の良い表現で、遊郭での様々な情景を、観客が百人百様の想像ができるような余裕を持って語られました。そして静かに荘厳に糸が打たれ、声が音色が身体中に沁みとおる。その時まさしく人々の心は時空をはるか超えるのです。あまりにも素敵で自分が今どこにいるのか忘れてしまっておりました。

こんな幸せな時間を過ごさせて頂いたことにとても感謝するとともに、一生懸命にお稽古に励み精進しなければと身が引き締まる思いでした。

その後の美味しいお酒を飲む前まではなのですが。

想像の旅へ

白鳥　奈津子

いつかの暑い夏の日。浴衣を着て訪ねた友人宅は、浅草観音裏にある古い木造長屋。二階の出窓で夕涼みの風を待っていると、吹き込んできたのは風に乗った三味線の音でした。ちょうど見番で夏祭りがあったようです。その家は、取り壊しも決まっていて今にも倒れそうな具合でしたが、所々に大工さんの技も見え、街の雰囲気と共に建っている無名の名建築と言えるような、味わいのある素敵な家でした。

私の実家は浅草から川を三本越えた先、葛飾柴又の辺りで「下町の風情があっていいね」と人にはよく言われるのですが、風情、情緒という言葉には程遠い東京の片田舎。生まれてから長い間住んでいましたが、地元に愛着が持てず、それどころか"ニセ？下町コンプレックス"のようなものがありました。

子どもの頃から歌舞伎や浮世絵など、江戸文化に魅かれて育ってきたため、今では同じ"下町"と称されるのに、中身は全然違って、歴史も文化も情緒もたっぷりある本当の"下町"、なかでも浅草は憧れの街だったのです。

そんな私にとって、あの日のシチュエーションで聞こえてきた三味線の遠鳴りは、自分がどこか遠い憧れの国や、憧れの時代に飛んで行ってしまったかのような、なんとも夢見心地な思いにさせてくれたものでした。あの時から、粋な三味線の音色に特別な思いを持つようになったのかもしれません。

いざお稽古をはじめてみると、むずかしいことが多く必死で、もちろんそれが面白くもあるのですが、夢見心地の境地には到底いたりません！夢見心地どころか、先日は寝ていた犬を私のヒドイ鼻唄で起こしてしまい、もの凄い勢いで吠えられる始末…。

そんな有様ですが、先生に新しい唄を入れていただく時、まっさらな気持ちで耳と心を開いていると、歌詞の言葉や邦楽の独特の音階、間合いに本当にうっとりとしてしまいます。ほんの数分の短い唄を通して、憧れの世界観、自分の体験だけでは得られない感情に触れることができる。また、いつか見た風景も音に乗せて鮮やかに思い起こすことができる。日々のお稽古は、想像の旅にでているような豊かな気持ちにさせてくれます。

いつか唄の世界へもっと深く旅立てるよう、今は譜面と手元とにらめっこしながら励む毎日です。皆さまご指導のほど、どうぞよろしくお願い致します。

地唄舞が織りなす紗

菊地　郁花

私は地唄舞閑崎流師範である閑崎ひさ女の孫娘として生まれ、三歳から祖母について地唄舞の道を歩んで参りました。

高校を卒業後、本格的に芸事の道に進むことを決意しましたが、当時の私は、人と話をするのも、人前に立つことも苦手でした。将来閑崎流の跡を継ぐにはこのままではいけないと考え、克服するために十九歳から明治座の養成所に一年八ヶ月間通いました。そして、その後の三年間は、洋舞や殺陣、商業演劇や大衆演劇にも挑戦し、様々な著名な方々と共演させて頂きながら舞台での礼儀作法や化粧の仕方など、多くの事柄を学びました。地唄舞以外にも目を向けることで、より一層その難しさや奥深さを身をもって感じ取ることが出来たように思います。

地唄舞は特に、唄の内容や地方との呼吸を大切にする必要があります。邦楽独特の間をしっかりと身につけ、唄と三味線もできる舞手になりたいと祖母に相談し、祖母と三十年来のご友人である布咏先生のご縁の糸をたどり、今年一月より入門させて頂けることになりました。

楽器の経験は、中学校の部活動として吹奏楽でフルートを吹いていました。また、ギターでフォークソングなどを趣味として弾いたりしていました。しかし、邦楽である唄や三味線は全く違うので、とても楽しく新鮮です。

先日の「美紗の会のつどい」では、始めて三ヶ月あまりで皆様の前で披露することは練習不足もあり、とても緊張しました。集中していたつもりですが、たくさん間違えてしまいました。次回は失敗しないよう、落ち着いて頑張りたいと思います。布咏先生をはじめ、皆様が温かく迎え入れて下さり、本当に素敵な時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

いつか布咏先生の地方で舞わせて頂けたらというのが私の夢です。

今後とも、何卒宜しくお願い致します。

糸ふしぎ

小野原　教子

二〇一三年九月末、わたしは二年半ぶりに東京に来ていた。土曜日の午後、はじめて美紗の会のお稽古を見学させてもらうことになった。わたしと同世代の方々が、端唄も小唄もこなされ、三味線も唄ものびのびと演じられている。そして、布咏さんの生のお三味線がすぐ目の前で鳴り響いている。わたしはそのときまだ、師匠のことを「布咏さん」と呼んでいた。CD音源で聴いて大好きだった曲「宇治茶」のお稽古をされている方もおられた。わたしはお稽古場を立ち去ることがなかなかできなかった。

その翌日、東京証券会館での花柳千寿文師の「千寿文の會」を見せて頂ける機会にも恵まれた。地唄「黒髪」をそのときはじめて生で聴いた。わたしの胸はその声の迫力に圧倒され押しつぶされそうだった。舞も三味線も素晴らしかったが、わたしは声の力というものをそのとき体験した。打ち上げの会にも参加させて頂いたが、師匠への尊敬の念が溢れているのに、お弟子さんたちがみなのびのびとお話されているのがとても印象的だった。お稽古を見学した帰り道もそうだったが、わたしはとてもうらやましい気持ちだった。

布咏師匠との出逢いは、北園克衛という詩人がきっかけだったと言える。物心ついてから、わたしは詩を書き始めたが、それはとても自然なことだった。両親ともにかつて詩を書いていたので、家には詩集がたくさんあった。初めて自分で買ったのは思潮社の現代詩文庫北園克衛詩集だった。父は学生時代まで九州におり、高橋睦郎さんと雑誌や新聞紙上で肩を並べ競い合っていたらしいが、早くに書いたものをすべて燃やし、また九州を同時に捨てて日本を放浪していた。しばらくたって、新聞の投稿欄で詩を教えてくれる人を募集していた母と出逢い、文通を通して交流を深め大阪で結婚した。二人ともう詩を書いていない。

母も通っていたことのある大阪文学学校に、十九歳のときわたしも入学した。今年一月二日に急逝した三井葉子との出逢いが待っていた。彼女が主宰する詩誌『樂市』にも同人として創刊号から参加した。失ってはじめて、三井葉子は唯一無二のわたしの詩の師匠だということを知らされた。少しずつ作品がたまってくると詩集を出版するのが目標になる。戸田ツトムさんが装丁されていた『北園克衛　二角形の詩論』という本が好きで、初めての本は戸田さんにデザインをお願いすることが夢だった。十余年の作品を集めて思潮社から処女詩集を出版した。そして夢もかなった。

photo:kat

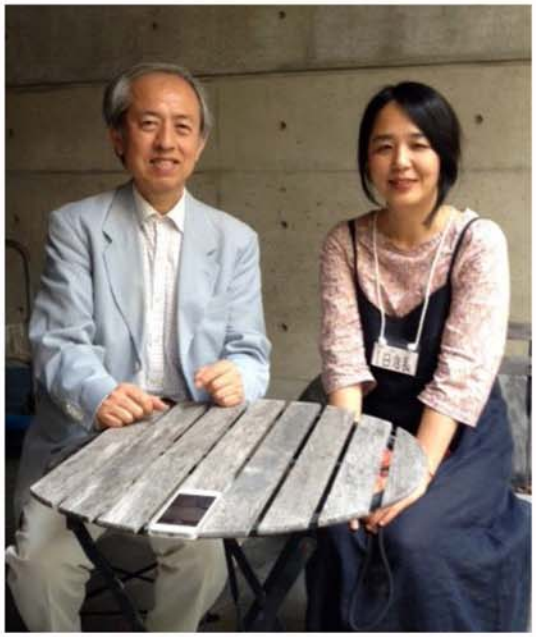
さて布咏師匠との出逢いに話を戻そう。二〇〇四年十月の日立目白クラブにはじまり、二〇〇七年十二月のセルリアンタワー能楽堂、続いて書肆啓祐堂の店主邸宅、二〇〇八年十月の東京都庭園美術館、二〇一〇年十月の世田谷美術館、続いて十一月の大阪山本能楽堂など、伝統的な舞台から個性的な空間まで様々な場所での演奏に接する機会に恵まれた。

この「たより」にも数回文章を書かせてもらったが、わたしは音楽家として西松布咏さんの大ファンだった。北園克衛の詩に曲をつけ、それを美しく唄われる、素敵なミュージシャン。『儚』のなかの「嘘のかたまり」に映像詩を寄せる機会を得たり、ニュアンスの会では、わたしの小さな詩「アユタヤの蜻蛉」に曲をつけ演じてくださる光栄も賜った。わたしにとって布咏さんは日本古典音楽の入り口だった。三味線の音にだんだん惹き付けられていく。けれども、ながらく自分にとっては別の世界だった。詩を書く者として、音楽家西松布咏さんとおつきあいさせて頂いていた。ジョンソルトさんの主宰する"highmoonnoon"から、わたしも第二詩集を出版してもらった二〇〇三年くらいからだろうか。そんなこんなで十年程が経過していた。

なぜ、いまわたしはまったく自分とは違うと思っていた世界にいるのか。二〇〇九年頃から、イギリスと日本を行き来する生活を送ってきたが、いっときは捨てようとおもった自分の国、そして神戸に一年半程前に舞い戻ってきた。敗者のような惨めな気持でもあり、生業にしている服飾研究と同時に私生活の軸足もロンドンに置いていたので、大きな決断だった。二〇一一年に、十五年間分の現代ファッション研究の成果をまとめ、水声社から一冊の書物として上梓した後、日本でできることはもうない、とも思ってもいた。去年夏、山を背に、海を望む、アパートに居を移した。研究対象は僧侶の衣装「袈裟」に変わったし、また直感でしかなかったがとても鋭い啓示のような事柄が続いて、日本の楽器「三味線」

に触りはじめていた。いわば西洋かぶれのわたしの変化に、家族はみな驚いていた。けれどもいちばん驚いていたのは自分自身だった。

平清盛の時代、日本は一時都が神戸の湊川にあった。そこは花街として有名だった場所で、現在は畳んでいる店も多いが風情は残っている。存在だけは知っていた邦楽器店を訪ねて事情を話し、東山にある小さな公民館での三味線教室に通うことになった。先生にお三味線を借りて弾いていたが、とにかく初めての日本の楽器に触るのが楽しくてしょうがなかった。週一回、二ヶ月間通った。そこでは、唄う人が決まっていて、一度も声を出すことはなかった。また、基礎的なことが不安なまま、上級者の方々に混じって、長唄の演奏に入るのに抵抗があった。難しいことがわかっていても、わたしは小唄をやってみたいと思っていた。やめてからしばらくして、神戸元町にある老舗のあられ屋の二階で、差し向かいでお稽古をつけてくれる小唄の先生のところに少し顔を出した。一回目から「音が違う」と感じてしまい、どうしても続けて通うことができなかった。冒頭に書いたように美紗の会のお稽古を一度知ってしまった後、また布咏師匠の「籠つるべ」をCD音源とはいえ聴いていると、もう他の「籠つるべ」の音色は、よほどでないと受けつけなくなってしまったのだろう。



半年間ほど色々と悩んでいたが、今年の二月末より、岐阜にお稽古に通わせて頂いている。新参者で県外からの参加にお弟子さんたちのご迷惑にならないかと気兼ねをするも、いったん師匠の手ほどきを体験すると、どん欲になって、図々しい自分を忘れてしまう。お稽古をつけて頂いている一時間は無我夢中、二ヶ月に一度しかないということもあり、次回まで一人で練習せねばならないため、あらかじめ断って録音させてもらっているが、一回一回のお稽古の音源はわたしの大切な宝物である。

「もっと早く入門させてもらえばよかった」――無駄にしてしまった時間をふと悔やむこともあるが、日本曹洞禅の祖道元禅師の言葉をそのたびに思い出すようにしている。『正法眼蔵』「道得」という巻、師匠と弟子の出逢いには「時機」といわれる必然的で運命的な出逢いの瞬間があり、出逢うまでの時間さえもその「時機」なのだと。詩を習い始めた頃に坐禅と出逢っていたが、イギリスで不眠症になって以降毎朝続けている。岐阜に通い始めた頃に出逢った、九州の伯父が師範をしている四半的弓道もはじめた。

日本人としてのわたしに、わたしは直面化した。わたしを忘れるのではなく、わたしから覚めていくような体験。糸とはかくもふしぎなるものかな。日本文化がわたしのなかに在ってくれて良かった。はじめて岐阜にお稽古に行く前夜、まだ布咏さんと呼んでいた頃に師匠に譲って頂いた三味線を抱えて、わたしは「お三味線があってほんとうによかった」と、その存在への感謝の気持で胸がいっぱいになった。

《今後の予定》

七月十三日（日）午後一時　国立小劇場
第五十七回　舞踊みそみ会
地唄　愚痴
舞　華生園衣
唄・三絃　西松布咏
地唄　出口の柳
舞　華生園
唄・三絃　西松布咏
尺八　善養寺恵介

八月十日（日）午後三時　岐阜かわらや大広間
第十四回　粋艶会のつどい
一門演奏会と親睦の宴

八月三十日（土）午後三時　軽井沢　鶴間邸
第六回　薊の会
幽玄と粋　―思い草葉末に結ぶ露の間も―
謡曲・仕舞　佐久間二郎
唄・三味線　西松布咏

九月十九日（金）午後六時　赤坂クラブ
第一回　江戸唄を味わふ
四畳半から宇宙へ　江戸唄をデザインする
唄・三味線　西松布咏
おはなし　浅葉克己

十月二十六日（日）午後三時
岐阜・高山 遊朴館ぎゃらりー
夢のあとさき
書　盃南　榮
三味線　西松布咏
ピアノ　辻隼人

十一月八日（土）十二時　赤坂クラブ
第四十八回　美紗の会のつどい
一門演奏会と親睦の宴

■たより 第78号
発行者　美紗の会
編集責任者　大久保　朋子
デザイン　近藤　幹則
■美紗の会
主宰　西松　布咏
稽古場　港区白金台三-二-二
白金台プレイス 三階
電話　（三四四一）一七二六
（五四四七）一二四一一
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5